

自分の言葉で世界とつながる子どもの育成

小学校 吉岡亜紀子、岩城 聡恵、岡田 海斗
研究協力者 三浦 和尚、中西 淳（愛媛大学）

1 主題設定の理由

国語部では「自分の言葉で世界とつながる子どもの育成」を目指して、昨年度より研究を開始した。新たな主題においても、これまでの研究で大切にしてきた、「国語科は言葉の力を育む学習である」ということを考え方の基盤として授業づくりを進めている。

このコロナ禍の中で、言葉の力の重要性が改めて問われている。不確かな情報を言葉によって見聞きし、それを咀嚼することなくそのまま他人に伝える。また、自分の考えやこれからの行動について、その答えを他人に委ね、他人に責任をとらせようとする。社会が混乱すればするほど言葉から責任が消え、「自分らしい、自分なりの言葉」が失われてきてしまっているように感じる。だからこそ言葉を正しく認識、理解し、「自分の言葉」で確かで豊かに伝えることの価値を改めて考えることが大切なのではないだろうか。

子どもの学びの場では、国語科の学習だけでなく、どの教科においても子どもが世界（学習材、他者、自分自身）とつながるとき、そこには必ず言葉が存在する。人は言葉を通じて、もの・こと、人とつながったり、自分の内面と向き合ったりするのである。「学習材」「他者」とつながり、「自分自身」と向き合ったとき、言葉は精選され「自分の言葉」になってくる。このような「自分の言葉」を私たちは大切にしていきたい。

また、学びの根幹を支える言葉の力を育成することは国語科の責務でもある。この責務を果たすためにも、国語科の学習で育まれた言葉の力を教科内で閉じることなく、他教科等や実生活でも「生かし、発揮できる」、生きて働く学びにしていく必要がある。各単元において、生きて働く学びを繰り返していくことで、子どもが「自分の言葉」を大切に、周りに存在する世界とよりよくつながる言葉の使い手として成長できると私たちは考える。

2 子どもと共に学びをつなぐ「国語科」の授業づくり

(1) 国語科における「子どもと創る『深い学び』」

ア 国語科における「深い学び」

国語科の学習では、子どもは「学習材」とつながり、文章の内容を明確にする読み方を会得したり、言葉による伝え方を習得したりしていく。さらに「他者」とつながることで、よりよい自分へと自己形成されていく。言葉を使って「学習材」や「他者」とつながりながら思考を深め、自分の言葉を磨きながら国語科における資質・能力を身に付けていくのである。国語科の学びを通じて、子どもの言葉の世界を広げる。そして国語科での学習にとどまらず他教科等へ学びを生かしたり、実生活で学んだことを発揮したりしながら、よりよい言葉の使い手として成長することに学習の意義があると私たちは考える。そこで国語科で私たちが目指す「深い学び」を

自分の言葉で世界（学習材、他者、自分自身）とつながり、他教科等や実生活において身に付けた言葉の力を「生かし、発揮しよう」とする姿が表れる学び

と捉え研究を進めていく。このような「深い学び」を各単元において実現していくことで、「自分の言葉で世界とつながる子どもの育成」を目指していきたい。

イ 子どもと共に学びをつなぐ国語科授業

学習や実生活の中で、子どもが「学習材」「他者」「自分自身」とつながり、自分らしく言葉を活用できるということは、言葉によって自分の周りの世界とよりよいつながりができて

いるということである。また、そのことは正しく、適切に言葉を活用することでできているということでもある。私たちは（図1）のように子どもが「学習材」「他者」「自分自身」とつながるように指導する。

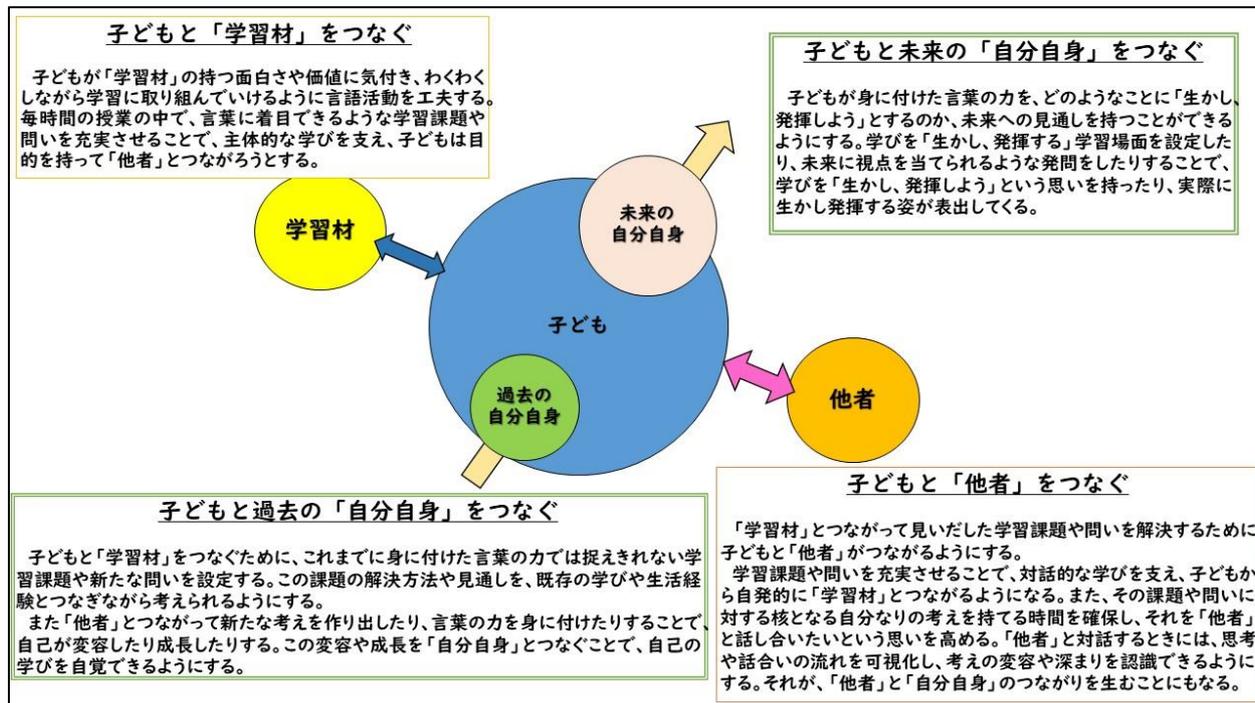


図1 国語科で学びをつなぐイメージ

(2) 子どもの学びをつなぐ指導の手立て

ア 「学習材」とつなぐ手立て

- ・ 学習意欲を高める魅力ある言語活動の工夫
- ・ 子どもにとって解決する必然性のある学習課題の設定

国語科では「言葉による見方・考え方」を働かせることができる授業を展開することで、資質・能力を子どもによりよく育成することができると思う。子どもが「言葉による見方・考え方」を働かせるために、教師がどのように子どもと「学習材」をつなぐかということに視点を当て研究を進める。子どもと「学習材」をつなぐために私たちは、魅力ある言語活動を学習の中に取り入れていきたいと考えている。私たちが考える「魅力ある」とは、まず、子どもの実態に即した言語活動であるということだ。子どものこれまでの学習を振り返り、どのような力が育っているのか、これから育成していきたい力はどのようなものかということも私たちは国語科の学習だけでなく、生活の様子などからも見取っていく必要がある。そして言葉の力を育成するために、子どもが「やってみたい」と思えるような言語活動を設定する。子どもが楽しさを感じ、確実に力を身に付けることができるように言語活動を工夫していきたい。

また、「言葉による見方・考え方」を働かせるためには、毎時間の授業での問いや学習課題についても子どもの実態に即したものでなくてはならない。「出会い」の場面では「学習材」との出会いから、子どもに問いや課題への意識を持たせることが必要である。国語科の学習で子どもが自発的に問いを持ったり、自ら課題を発見したりすることは容易ではない。「他者」とつながり対話することでよりよい答えが導かれそうな問いや、これまで身に付けた言葉の力では解決することができない課題などを教師が意図的に働き掛けることが必要となる。受動的な子どもに対して教師が適切に働き掛けることで子どもは疑問や違和感を持ち、「学習材」とつながろうとするだろう。そのつながりの中で、子どもが「解決したい」「挑戦したい」と感じられるよ

うな課題や問いを設定していく。

このような解決する必然性のある問いや課題を解決するための言語活動には、自ずと相手意識や目的意識が生まれてくるはずである。子どもが相手意識や目的意識を持って言語活動に取り組むことが「深い学び」の実現につながるであろう。

イ 「追究」の場面において学びをつなぐ手立て（主に他者と）

- ・自分なりの考えを持つことができる時間や空間の確保
- ・対話するための学習環境の工夫

「追究」の場面において子どもの学びを深めていくためには、子どもと「他者」がよりよくつながることが必要である。そのためにも、子どもが問いや課題に対する自分なりの考えを持つ時間や空間を大切にしていける。自分なりの考えを持つためには既習事項を活用すること、叙述を根拠に思考すること、考えを口頭や記述で表現することなどが必要である。これらの個で学ぶ時間や、思考できる学習空間を適切に取り入れることで漠然とした考えでもよいので、自分なりの考えを持たせるようにしていく。

こうして、自分なりの考えを持った子どもには、「他者」とつながって自分の思いを伝えたり「他者」の考えを聞いたりして、よりよい答えにしたいという欲求が出てくるであろう。この欲求を満たすために教師は他者との対話を促す。対話をよりよいものにするために、自分の考えを出す、相手の考えを聞く、伝え合う、考えを練り合う等の対話するための十分な時間を確保する。また、対話するための学習環境（対話する人数、情報を得る手段等）づくりはできているか、安心して話すことのできる仲間づくりはできているかという対話するための空間を大切にする。

また、何のために対話をするのかという目的意識を子どもに持たせる。例えば「読むこと」の学習においては、文章を読んだ感想や考えを共有するのか、互いの思考のずれを見付けて問いを作っていくのか、問いに対する答えを練り上げていくのかなど、その目的を示し、対話することが必要である。その際、どの言葉から考えたのかを根拠として対話することは、「言葉による見方・考え方」を働かせる上で欠かすことはできない。

ウ 「振り返り」の場面において学びをつなぐ手立て（主に自分自身と）

- ・振り返りの視点を持たせる具体的な問い掛け
- ・言葉の力を他教科等や実生活での活用へとつなぐ振り返り

子どもが魅力的な「学習材」とつながり、「他者」と対話し学習を終えたとき、その言語活動を行ったこと自体に満足感を得やすい。その一方で、ねらいとする資質・能力の習得状況や、自分の考えの変容について自覚しにくいということが多々ある。これまでも「楽しかった」「またやってみよう」という印象だけで学習が終了してしまうことが多くあった。授業時間ごとに「何が分かったのか」「話し合うことでどのように考えが変わったのか」「言葉について学んだことをどのように活用できるか」等、学びの本質に迫るような振り返りの視点を持たせ、記述させることで自らの学びを丁寧に見詰め直していけるようにする。また、単元における「振り返り」の場面では、他教科等や実生活での活用場面と結び付け、生活に生きて働く言葉の力になるよう意識させる。また、実際に単元の中に「生かし、発揮する」場面を設定することで、学びを自覚できるようにする。

(3) 「子どもと創る『深い学び』」における評価

ア 評価の視点

私たちは子どもの

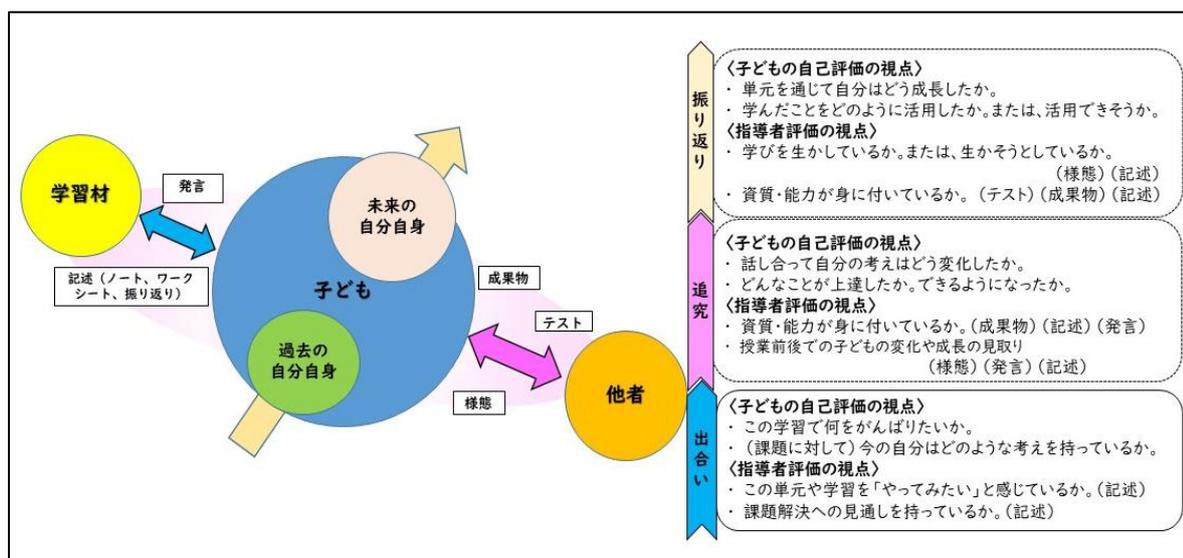
自分の言葉で世界（学習材、他者、自分自身）とつながり、他教科等や実生活において身に付けた言葉の力を「生かし、発揮しよう」とする姿が表れる学び

を目指して授業づくりを進めている。この姿が表れているとき子どもには、国語科で育成を目指す言葉の力が身に付いているはずである。言葉の力が身に付いているかどうかを見取るためには、学習指導要領に基づきながら、単元や授業に即した身に付けさせたい言葉の力を明確にする必要がある。それを目標や評価規準として指導案上に示していく。実際の指導と評価においては、三つの資質・能力を一体的に育成し評価するが、教師の視点としてはそれぞれの観点で目指す子どもの姿を想定しておくことが必要である。

さらに、子どもが「深い学び」を実現しているとき、この三つの資質・能力を基盤として、身に付けた言葉の力を他教科等や実生活で生かして（生かそうとして）いるはずである。その生かし、発揮する姿は授業の中で見られる可能性もあるし、国語科の授業だけでなく他教科等の学習や生活の中で表れてくる可能性もある。また、その姿が学びの後、すぐには表れないことも考えられる。さらに、その姿が様態として表れるのか、記述から見えてくるのか、子どもの発言から見えてくるのか明確にしにくいところがある。そこで、子どもの「深い学び」を実現している姿を見取るために、長い時間軸で子どもを捉えていかななくてはならない。また、より広い空間軸で子どもを捉えるために、評価対象を広げていく必要もある。子どもの姿を言葉という視点で捉え、授業や生活の中で見えるエピソードを集積し、指導・評価の改善に資する評価の根拠としていきたい。そして、この評価を子どもに適切にフィードバックしていくことで学びの原動力である子どもの〈自己効力感〉を大切にしていきたい。

イ 評価の具体的な手立て

長い時間軸と広い空間軸の中で見えてくる子どもの成長の見取りをより確かなものにするために、1単元において子どもの記述を積極的に指導者評価に取り入れていく。まず「出会い」の場面で、これからの学習を「やってみよう」と感じているかどうかを自己評価への記述から見取っていく。また、「追究」「振り返り」の場面では子どもの考えの変容をノートやワークシートへの記述から見取る。さらに、子どもが自己の成長や変化を自覚しているかということについても記述から見取るようにしていく。また、学期末や学年末には、国語科の学びを他教科等や実生活でも生かしているか（生かそうとしているか）という振り返りの視点を発達段階に応じて示し、記述させることで具体的な姿を見取る材料としていきたい（図2）。



(図2) 「子どもと創る『深い学び』」における評価

(岡田海斗)